

同朋大学佛教文化研究所報

第 29 号

発行日 平成二十八年三月三十日
編集・発行 同朋大学佛教文化研究所

代表者 小島 恵昭

〒四五三・八五四〇

名古屋市中村区稲葉地町七の二

TEL (〇五二) 四二一―一三三三

FAX (〇五二) 四二一―一三六九

e-mail : bc-inst@doho.ac.jp

(題字は池田勇諦元学長)

今回、所長の小島恵昭先生より、「所報」の巻頭文を突然書くように依頼され、所員でもない私が果たして何を書くことができるのか、年末年始は、そのために悶々と悩んでいました。

小島先生とは、かつて大学の一般研で同僚となつて以来、既に三十年近く月日が経ちました。しかも今年の三月には、大学を同時に退職し、お互いに特任教授として余生を送ることになります。

そこで、この機会に私のささやかな人生を辿りながら、とりとめもない学問的な歩みを振り返りたいと思います。

今まで、私は何をやってきたのか？ 日本の大学では、文学研究の真似事を少しばかりやった記憶が微かにありますが、所詮、外国のやり方を模倣するだけであり、研究のあり方そのものに強い疑問を抱いていたことを覚えていています。

そして、転機は、やはり今から三十年以上前に、フランス政府給費留学生として、約三年間、ボルドー大学大学院で、フランスの学者から研究の方法を直接に教わったことだと思います。当時は、十六世紀の思想家であるモンテーニュの著作に取り組み、その時に書いたフランス語の論文は、恥ずかしいことに、今でもインターネットで読むことができます。宗教戦争の時代に、モンテーニュはギリシア・ラテンの古典を徹底的に咀嚼しながら、自己独自の思想を表明した人物です。難解な十六世紀のフランス語を毎日ゆっくりと読み進めていたことは、確かに貴重な経験ですが、納得のいく成果を示すことは、当然ながらできませんでした。その後、帰国してからは、モンテーニュの影響を受けた十八世紀のルソーやデイドロ、そしてルソーの翻訳を行った中江兆民や、福沢諭吉、徳富蘇峰などの近代日本の思想家に取り組み、論文らしきものを三十

あまり書いてきました。実は、仏教文化研究所の紀要にも、かつて一度だけ、「近代

退職の偶感

同朋大学文学部人文学科教授 佐藤 誠

日本の西洋像―福沢諭吉と中江兆民―という雑文を掲載していただいたことがあります。ところで通常、若いころに西洋の事柄に取り組んだ日本人は、晩年になると「日本回帰」に向かう態度を取ると言われています。しかしながら、私自身は、「日本回帰」どころか、ますます西洋の思想や文化に傾倒しつつあり、退職後が今から楽しみです。特に最近では、若いころに取り組んだモンテーニュの思想に改めて興味を抱き、彼のフランス語を読み解く喜びをひしひしと感じています。その理由は、インターネットの普及により、様々な西洋の古典の朗読を無料で聞くことのできるサイトを知ったためです。何度もモンテーニュの朗読を聞くと、以前よりもかなり早く原文を読むことができるようになり、身近に古典に接することが可能となりました。実は、モンテーニュばかりではなく、英語、ドイツ語、フランス語の主な作品や、ヨーロッパやアメリカの大学の講義や講演までもが、気楽に聞くことができます。そのために、今まで通読してきた様々な古典を、生きた言葉として読み直す楽しみが生じてきました。

私は、残念ながら、恩師と呼ぶことのできる人はいませんが、哲学者としてのアラン(二十世紀フランスの人物)は、学生時代から読んでできていますし、その力強いフランス語の文体は、今でも時々読み返しています。アランは、その意味で、私の精神的な支えとなっています。彼は、古代ギリシアから近代に及ぶ古典を徹底的に反復精読し、作品を通じて真摯に人間を捉える態度を示しています。古典を自家菜籠中の物にして、独自の思想的立場を表明したアランは、思想を少しでもじっくりと把握したいと願っている私にとって、今でも貴重な模範となっています。「精神の追求には終わりが無い」というモンテーニュの言葉を時々思い出しながら、定年後の精神の庭をゆっくりと耕していきたいと思っています。

蒙山文化芸術と浄土思想研討会の研究報告

日程：二〇一五年六月二日～六日

場所：中国太原市三晋国際飯店

花 栄

はじめに

まず、今回の学会シンポジウムにあたり、ご招待して下さった中国社会科学院世界宗教研究所の嘉木揚凱朝教授（同朋大学仏教文化研究所客員所員）を代表とする中国社会科学院世界宗教研究所、中国宗教学会、山西省社会科学院、三晋文化研究会、及び三晋国際飯店の有縁の方々に深く感謝を申し上げます。

シンポジウムの研究発表と中国寺院の現地リサーチにあたって、同朋大学から中村薫特任教授、本研究所の藤村潔客員所員と、私、花栄客員研究員の三名が参加したので、その参加報告をさせていただきます。

第一日目

六月二日に私たち三人は中部国際空港から青島経由で北京へ出発した。午後一時頃に北京国際空港に到着し、嘉木揚先生のお出迎えを受けた。中国滞在期間中、嘉木揚先生は常にご厚くお世話をしていただき、共に行動して下さった。北京国際空港から車に乗り、最初に五台山へ向かった。途中休憩をはさみ、夕方六時頃に五台山へ到着した。

第二日目

この日は実際に五台山に登った。五台山といえ、中国山西省東北部の五台县にある古くからの霊山である。標高は三〇五八メートル。仏教

では文殊菩薩の聖地として信仰を集めている。一日ですべてを回ることは不可能であり、私たちは五台山の中心部分である黛螺頂へケーブルリフトで登った。

頂上に着いた時、私の目にある女性の姿が留まった。在家の信者のように見えた。女性の服装から見て二十代後半と思えた。膝の所に巻いてあるものから察すると、一九〇〇メートルの山道をずっと祈りながら登ってきたようであった。そして口に何かを称えながら丁寧に礼拝していた。私は彼女の元へ近づき、何の経典を読誦しているのか耳を傾けたが、モンゴル語や中国語ではなく、チベット語のように聞こえた。私は彼女の姿を見て、現地人の仏教に対する信する力、すなわち信仰心というものが、どこから沸き起こるのか関心を抱いた。

嘉木揚先生のご案内で、チベット寺院の光仁寺僧侶の日出巴氏とお会いし、チベット仏教の由来などをお聞きすることができた。次にモンゴル寺院の鎮海寺・羅睺寺の僧侶宝山氏とも会談し、寺院の歴史文化についてご説明いただいた。そして、碧山寺、菩薩頂、鎮海寺などを訪問し、中国五台山における寺院の現状について学んだ。

その後、車で山西省太原市へ向かい、夜七時半頃に今回の学会会場である三晋国際飯店（ホテル）に到着した。

第三日目

この日は午後から、学会参加者と一緒にバスに乗り、蒙山大仏を見学した。蒙山大仏は太原市西南約二〇キロにある開化寺に造立された仏像である。北斉文宣帝の時代（公元（西暦）五五〇～九）に造られたという。その後、破壊され、公元六二〇年に再造された。蒙山大仏を見学して、今回の学会シンポジウムに参加した意義を強く実感した。

第四日目

この日は、午前十時から夕方の十八時まで学会発表が行われた。発表

は午前と午後でセッションが分かれていた。

中国社会科学院の王志遠先生の挨拶に始まり、計三十四人の研究発表があった。その中で、中村先生、嘉木揚先生、藤村先生、私という順番で発表した。本学関係者の題目は次の通りである。

中村 薫 「日中浄土教論争」 原題「中日浄土教論争」

嘉木揚朝 「浄土思想比較研究」 原題「浄土思想比較研究」

藤村 潔 「自行念仏問答」 における阿弥陀仏観」

原題「试论『自行念仏問答』的阿弥陀佛観」

花 栄 「親鸞教学における転成思想について」

原題「关于亲鸾教学的转成思想」

シンポジウムには八十人を超える参加があった。フロアから活発な意見があり、討論がなされた。今回の研究発表を通して、日中浄土教思想の比較研究や浄土教に関する非常に多くの論点が提起された。

第五日目

朝早く太原から高速鉄道で北京へ戻り、午後の飛行機で名古屋に帰国した。以上、四泊五日の日程であったが、本研究所客員所員の嘉木揚朝先生のご高配に預かり、たいへん有意義な学会発表をすることができた。学会で得たさまざまな論点について、また本研究所内の中国日本仏教思想史研究会などで議論を深めていきたいと思っている。

首届蒙山文化艺术与净土思想研讨会 2015.6.5



「アーカイブス閲覧」(デジタルアーカイブス)と

史資料データ

——同朋学園所蔵の法隆寺一切経の視覚情報化をめぐる

藤井由紀子 工藤克洋

前年度の所報で、研究所がこれまでに行ってきた研究活動の蓄積を、「アーカイブス閲覧」として、デジタルアーカイブス化する構想を発表したところ、学外の研究関係者からも強い関心を寄せていただいた。その後、基礎作業を積み重ね、現在までにアーカイブスのメインとなるデータベースについては、法隆寺一切経を中心に、画像情報とテキスト情報を一体化させた画像一体型データベースの形でデータ入力を進め、それを広く再利用できるように加工を試みた。また、研究所発足以降、これまでの成果物については、紀要・所報・図録を中心に論文等をデジタル化し、アーカイブスを通してダウンロードできるようにしたほか、本学で進行中の機関リボジトリ化にもそれらに対応させている。こうした現状を踏まえて、本稿では「アーカイブス閲覧」の課題と、今後の見通しについて報告したいと思う。

今年度、画像一体型データベースに関しては、公開上の問題を考え、本学の所蔵品から着手することにした。特に、平安時代後期の法隆寺一切経十九点(山田文昭氏旧蔵)を本学が所蔵することはあまり知られておらず、この学術的にも貴重な史料を積極的に活用していくため、秋のギャラリ展示と連携を図りながら、公開に向けてデジタル化を進めた。具体的には、挿図のように、全紙をデジタル画像で閲覧できるようにしたほか、名称、形状、法量、奥書などの書誌情報は、他の研究機関における典籍調査等で一般的に行われているような調査カードの形式を採用し、一覧にして表示している。なお、今回、一点一点の史料を自分たちで撮影していく作業を通して、文字の粗密や筆致の乱れなど、国家レベ

ルの写経とはまったく違った、民間写経ならではの特徴を改めて認識させられたが、もし仮にそうした経巻全体の姿を視覚的情報として把握できれば、奥書の記載内容を中心に進められてきた従来の研究に新しい視座を切り開くことも不可能ではない。史料の新しい評価軸を設けることができるかどうか。未知の試みではあるが、画像一体型データベースの最も積極的な活用法として、写真の高精度化とあわせて、今後検討していきたいと考えている。

もうひとつ、研究所では、これまで三十七年にわたって真宗寺院を中心に史料調査を行ってきたおり、写真も含め、約一万点の調査データが研究所内に蓄積されている。来年度以降はこうした調査データに基づいて、体系的なデータベースを構築していきたい、と考えている。しかし、撮影した画像は経年劣化しているものも少なくなく、色合いなど、画像一体型データベースのコンテンツとして必ずしも適切な状態にはない。また、当然のことながら、過去の調査段階ではデータベース化を想定しておらず、調査内容に粗密があり、しかし諸事情から再調査が難しい場合も少なくない。データベースにある程度の統一性を持たせるためにはどのようにするべきかが課題となる。さらに、「アーカイブス閲覧」を通して調査内容を公開していくにあたっては、所蔵者のご理解をどう得るかということも重要な問題である。調査後も所蔵者との間に継続した関係を構築させていきたいと思います。からアーカイブスを運営していく必要があり、魅力的なデータベースの構築、公開に関して、是非ともご理解をたまわりたく思っている。



《研究会活動報告》

アジア仏教研究会 活動報告

武田 龍

実施日 4/17、6/24、9/25、12/11、2/17

参加者 武田龍、玉井威、宮崎保光、中川剛マックス、蒲池勢至、

岩瀬真寿美

仏教における最高究極の価値とは何か、を探究することを目的として、アジア仏教研究会は二〇〇四年四月に設立され、活動を開始した。以来十二年にわたり経典を読むという作業を黙々と続けている。原始仏教の知識を基礎に置いて大乘経典を読むという方法は、仏教の歴史に添った理解を求めるためであり、それには広い視野が必要になる。幸いなことにメンバーに恵まれて続けてこられた。

各地に伝えられた仏教の教えは、それぞれの地に根付き定着していく過程でさまざまな要素を取り込んだ。在地の信仰や習俗と関わることで変容を遂げた。さらに時代の要請を受け止めることで新しい境地と新しい道を開いてきた。今では仏教は各地でそれぞれの存在形態を示している。研究会では、現代という観点からこれらの事がらにも関心を寄せてきた。諸国の仏教の事情を知るために、外部から講師を招聘し講演会を行った。また現地へ出かけ、活発に活動する教団の中へと入り、交流を図りつつ調査を行った。これらの成果は既に『同朋大学佛教文化研究所紀要』に報告されている。私たちの研究会は、単なる経典読みを目的とするものではない。現代の仏教を主題とする。

「仏教とは、仏陀を開祖とし、涅槃ないし悟りと救いを最高究極の価値ないし目的と見る文化的総合的な体系である」（前田惠學『現代スリランカの上座仏教』まえがき）ことを念頭に置き経典読解に臨む。

これまでに浄土三部経を完読した。更に続けて『法華経』（岩波文庫）を読み進め、「葉草喩品」を読み終えた。三乗方便、一乘真実の教えを説くために比喻を多用する法華経の面白さが分かりかけた。

真宗史研究会 活動報告

安藤 弥

二〇一五年度は次のとおり、二回の研究会を実施した。

第一回目（通算第三二回）

【日時】十月十五日（木）一六時三〇分～一八時

【報告者】青木馨（客員所員）・安藤弥（所員・幹事）

【題目】東本願寺総会所の歴史的検証

第二回目（通算第三三回）

【日時】二〇一六年一月三〇日（土）一三時三〇分～一七時三〇分

【報告者①】小島智氏（真宗大谷派名古屋教区教化センター研究員）

【報告①】「親鸞聖人と尾張門徒」展の開催に向けて

【報告者②】井川芳治氏（「親鸞聖人と尾張門徒」展スタッフ）

【報告②】存如上人下付親鸞聖人御影と親鸞「左上の御影」の研究

【コメント】蒲池勢至（客員所員）

本年度の第一回目は、二〇一五年六月二十九日に閉所式を迎えた東本願寺総会所について、史料に基づき、その歴史を確かめる研究報告を行った。江戸時代後期に両堂再建に取り組む門徒の示談所として始まり、大正五（一九一六）年に聞法道場の性格を持った恒常的施設として再建され、現在に至った歴史を概観し、その歴史的意義について議論した。

第二回目は、来年度四月に行われる予定で本研究所が協力している真宗大谷派名古屋教区・名古屋別院親鸞聖人七百五十回御遠忌法要の企画展「親鸞聖人と尾張門徒」展に向けた展望報告と関連する研究報告を行った。展示内容の概要と見どころを確認し、また、展示予定の親鸞聖人御影が左手を上にする像容であることの意義に関する検討が行われた。

次年度も引き続き二回程度の研究会活動を予定している。

中国日本仏教思想史研究会 活動報告

藤村 潔

実施日 4/22、5/20、7/1、9/17、10/21、11/25、12/17、1/27
 参加者 玉井威、藤村潔、高木祐紀、花榮、中川剛、廣田万里子

本研究会では今年度から、『大日本仏教全書』第三卷に収録される『八宗綱要』二巻を定本として原典の読解を始めた。昨年度までは『大乘起信論』の研究だったが、今度は日本の『八宗綱要』の視点から、仏教全体に亘る基礎教理を把握したいと考えている。『八宗綱要』とは、凝然(一一四〇)〜一三三二)が二十九歳の時に上梓した著作である。八宗とは、俱舎、成実、律、法相、三論、天台、華嚴、真言である。参考文献としては主に鎌田茂雄『八宗綱要』(講談社文庫)と平川彰『仏典講座 八宗綱要』(大蔵出版)上下巻を参照している。また、必要に応じて凝然『三國仏法伝通縁起』三巻、存覚『歩船鈔』二巻の資料を参照している。

今年度は、「三國の仏教史と「俱舎宗」まで読解、研究を進めた。俱舎宗は「三世実有法体恒有」の説を根本教義とする。これについて参考書は辞書の解釈の域を出ない。そこで研究会では諸原典やインド仏教の視点を踏まえて、「三世実有法体恒有」の文脈読解を試みた。例えば、赤い花があるとする。赤い花が散っても、人は赤い花を考えることができる。これから赤い花が咲こうとしても、人は赤い花を考えることができる。このように人が過去、未来の赤い花を考えることができるのは、赤い花が三世に亘って実在するからである、といった見方が成立する。

以上、本研究会では、『八宗綱要』の文脈に読み取りながら、従来の学説を批判検討し、妥当な解釈を導き出したいと考えている。

来年度は、読解対象を『八宗綱要』の成実宗、律宗の教説に移して考察を進めていきたい。

「日本仏教の成立と展開」研究会 活動報告

脊古 真哉

「日本仏教の成立と展開」研究会(小島恵昭・大山誠一・黒田龍二・脊古真哉・吉田一彦)では、各研究参加者の研究領域・関心を基礎に、幅広く日本仏教・日本宗教に関わる問題を取り上げてきている。二〇一五年度には、二〇一五年八月一日に研究会を、二〇一六年二月二〇日・二一日に現地踏査を実施した。

研究会では、脊古の「春日大社の成立―都城郊外に分祀された外威の神―」の報告が行なわれた。ここでは奈良時代の春日大社の成立をめぐる、参加者各位により、活発な議論を展開することができた。

現地踏査は、京都府木津川市の涌出宮(和伎坐天乃夫支売神社)の新春の宮座行事である居籠祭いろうまつりの調査を中心に、二月二〇日・二一日の両日にわたって実施した。二〇日午後には、奈良市の奈良国立博物館で開催中の特別陳列「お水取り」「伊豆山神社の歴史と美術」を見学し、旧大乗院庭園(名勝大乗院庭園文化館)を踏査し、夕刻より涌出宮の居籠祭の門の儀「大松明の儀」を調査した。二一日には、午前中に木津川市の岩船寺・浄瑠璃寺・海住山寺を踏査し、午後には居籠祭の「饗応の儀」[御田植祭みけうまつり]の調査を実施した。

今回の居籠祭の調査は、二〇一二年の兵庫県加古川市の鶴林寺および加西市の東光寺の修正会、一三年の奈良県桜井市の大神神社の御田祭、一四年の東大寺の修二会、一五年の和歌山県伊都郡かつらぎ町の遍照寺・大日堂の修正会に続く新春行事の調査であった。今後とも新春行事の調査を継続し、参加者のこれまでの他の調査の成果も加えて、遠からず仏教文化研究所の展示事業で新春行事をテーマとする展示を実施したいと考えている。

「教行信証」学習会 活動報告

吉田 暁正

講師 張 偉 先生

趣 旨 漢文として『教行信証』を読む

会 場 同朋学園Dオブザ閣蔵2F 多目的会議室

テキスト 東本願寺刊『真宗聖典』（必要に応じて資料配付有）

開催日 5/28、6/25、7/23、9/24、10/22、11/26、

1/28、3/24

今年度も、『教行信証』『化身土巻』における善導の『観経疏』の引文を読み解きつつ、学習を進めている。（『真宗聖典』三三四頁）

『観経疏』『序分義』における、「欲生彼国者」より下「名為浄業」に至るまで、という解釈の中で、善導は、一切衆生の機には、二種類の機、すなわち定善の機と散善の機があるとし、定善はすべての衆生が行じられるわけではないから、「散動の根機に応じて」、三福を開顕したと説いている。そこに、「浄業」という如来のはたらきが問題となる。人間のはたらきは、汚染業であり、善業も悪業もそこに含まれる。善も悪も人間にとっては迷いの世界における姿でしかない。その迷い全体を包んで、如来から衆生にはたらくのが清浄業、浄業であり、三福として開かれた行であることを学習した。

続いて、『観経疏』『散善義』における、二種の真実、「自利真実」と「利他真実」について学習している。特に、「利他真実」についての説明が空白であることを問いとして、善導の意図と、親鸞の受け止めを尋ねている。

仏教教育研究会 活動報告

北島 知量

参加者は、北島、岩瀬、花菜の三人。実施回数は四回。五月だけは一時からであったが、七月、十月、十二月は時から北島の研究室で行った。この研究会では、各自の学会発表の草稿、論文の草稿などを発表しあい、質疑応答を中心とした活発な議論を積み重ねてきた。

扱われたトピックスは「道徳教育と禅」「自我の発達」「乳幼児―子供の自我」「超越と教育」「唯識」「親鸞・道元・鈴木大拙」「コールバーグ」「十牛図」「安心」「自我・無我」であった。

《研究所新収史料について》

二〇一五年度の研究所新収史料については次のとおりである。詳細については、『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三五号（二〇一六年三月刊行）において紹介するので併せて参照されたい。

○正観寺旧蔵法宝物史料

木造阿弥陀如来立像・方便法身尊像（蓮如裏書）・方便法身尊像（裏書無・推定証如期）・聖徳太子影像（明治十五年裏書）・七高僧連坐像（明治十五年裏書）・親鸞影像（文化九年裏書）・達如影像（明治十五年裏書）・嚴如影像（大正十年裏書）・乗如影像（寛政九年裏書）・蓮如影像（明治四十四年裏書）・徹岸似影（天保十五年裏書）・親鸞絵伝（大正二年裏書）・東本願寺家臣団連署状（天保十三年）・報恩講式文・嘆徳文・御俗姓・観音像読縁起・経箱・御伝鈔箱・御文箱・打敷一二点・水引二点・七条袈裟・横被・幕

○宣如書状 一通

紙本墨書・軸装 縦二八・二cm×横四二・九cm

*なお、受け入れ作業中のものである。

二〇一五年度彙報

《研究所構成メンバー》

所長 小島 惠昭
 所員 服部仁(人文学科) 木野美恵子(社会福祉学科)
 平野仁美(社会福祉学科)

所員・幹事 安藤弥(仏教学科)

研究顧問 小山正文

所員(非常勤) 工藤克洋 藤井由紀子
 青木馨 岩瀬真寿美 大山誠一 岡村喜史
 蒲池勢至 北畠知量 ギャナ・ラタナ

黒田浩明 黒田龍二 嘉木揚凱朝 脊古真哉
 武田龍 玉井威 藤村潔 松金直美 吉田暁正

吉田一彦

客員研究員 飯田真宏 市野智行 花栄 川村伸寛 高木祐紀
 中川剛 新野和暢 松山大

《所員会議》
 4 / 7 5 / 12 6 / 9 7 / 14 9 / 30 10 / 13
 11 / 10 12 / 11 1 / 12 2 / 2 3 / 10

《公開講座等》

・現地で学ぶセミナー

第1回 7 / 4 (講師:脊古真哉客員所員)

「高野山と丹生明神・高野明神―高野山の神仏習合―」

第2回 11 / 30 (講師:工藤克洋所員)

「東寺百合文書」の世界―世界記憶遺産にいたるまで―

* 特別講師:川端泰幸氏(大谷大学)

・「教行信証」学習会(詳細は前掲活動報告のとおり)

《ギャラリー展示》

・前期 「三河土呂の蓮如忌―本願寺蓮如生誕六〇〇年記念―」

(会期:7 / 17 ~ 7 / 24 担当:安藤弥所員)

・後期 「法隆寺一切経と書写者―経巻をいろんな角度で学んでみよう―」

(会期:11 / 13 ~ 11 / 27 担当:藤井由紀子所員)

《研究・調査活動》

・真宗寺院史料調査

5 / 1 真宗大谷派伏見別院(京都市伏見区)

真宗大谷派大津別院(滋賀県大津市)

7 / 3 専了寺(真宗大谷派・岐阜県養老町)

徳願寺(真宗大谷派・岐阜県養老町)

8 / 6 寿福院(真宗高田派・三重県鈴鹿市)

8 / 26 正福寺(真宗大谷派・愛知県岡崎市)

9 / 7 ~ 8 浄嚴寺(真宗大谷派・岐阜県海津市)

浄誓寺(真宗大谷派・岐阜県神戸町)

永徳寺(真宗高田派・岐阜県神戸町)

2 / 19 浄嚴寺(真宗大谷派・岐阜県海津市)

3 / 3 西嚴寺(浄土真宗本願寺派・岐阜県各務原市)

・法隆寺一切経調査

10 / 26 大谷大学(京都市北区)

12 / 21 大谷大学(京都市北区)

・その他(随時、持ち込み、問い合わせのある史資料の基礎検討など)